福円寺には、南北朝時代の作と推定される「紙本着色法然上人図像」があります。それは縦が四尺余り横が二尺余りの軸装されたものですが、いつ頃から何のために寺に有るのかは不明のままです。ただ、そこに描かれた法然上人は、雲の上の蓮台に座り袈裟・衣をまとい、お顔をやや左に向けて合掌されて、背後に光輪らしきものも見られることから、来迎引接の形を示した図像だと言われています。

来迎図の多くは、弥陀三尊図や釈迦三尊図の様に、仏が菩薩を伴って衆生の前に立ち現れる姿を描くもので、江戸時代には臨終を迎えた人の病床に図像を掛けて、極楽往生を死に逝く人にも、その家族にも確信させるはたらきをした物のようです。中にはその図像の仏様の御手から赤い糸を垂らしていまわの際の人の手と結んで、まさにいま極楽世界に迎えとられるぞと、安らかに死に誘う工夫を加えたものもあったようです。

親鸞聖人のお手紙に、明法坊の往生について関東の門徒方に送ったものが何通もありますが、そこでは往生について、臨終に仏が来迎して浄土に往生するのだとは、一言も仰っていません。また、臨終に何か奇瑞が現れて、極楽往生が決定するとも仰っていません。「明法坊なんどの往生しておわしますも、もとは不可思議のひがごとをおもいなんどしたるこころをおもいかえしなんどしてこそそうらいしか。」明法坊（山伏弁円）は日頃のこころを翻して、阿弥陀の本願に帰した、それを往生と仰っている様に思います。別の手紙では「往生の信心は、釈迦・弥陀の御すすめによりておこるとこそみえそうらえ」とも言われ、宗祖は明法坊のことを念仏の信心に帰した御同朋と深く敬愛され、明法坊が念仏者となったのはひとえに本願のはたらきによると、確かに頷かれていたのだとおもいます。

ですから、真宗の教えを伝統する寺院としては、「来迎引接の図像」は相応しい什物とは言えないのかも知れませんが、この図像も世の人々の切なる願い（要望）から描かれたものなのでしょう。

法然上人のお姿は、雲上の蓮台にお座りですから、来迎仏として描かれたものですが、合掌する姿でもありますから念仏を勧めるものでもあります。救いの見えない人の世に現れ、諸仏として浄土の教えを明らかにし、「念仏申せと」ひとえにすすめられたおはたらきと、見ることが出来るのではないでしょうか。心の奥底ではまことの救いを求めながら、迷い惑う人々の、切なる願いに応えてきた、本願の営みの多様さを思わずにはおれません。

境内の南東隅に立てられた土蔵は、内部に八角の木造の構造物を持つ「輪転経蔵」というものです。建物（土蔵）が内部の構造物を上下で支え、独楽の様に回転するように造られています。チベット仏教などで見られる「マニぐるま」と同様に、経典の納められた夢殿に似た構造物を回転させると、経典を読誦したのと同等の功徳をえられるとされ、江戸時代にも造営が流行した時期があったようです。

県内では珍しいようですが、能登の総持寺や滋賀県の三井寺、永源寺にも立派なものがあります。経蔵自体は寺院に不可欠な建物といえましょうが、わざわざ「輪転経蔵」という形にしているのは、やはり経典自体の「法力」的なパワーを祈願に用いようとした意図があったようです。福円寺の経蔵の前に立てられた石灯篭に建立の事情が刻まれていますが、疫病の流行があり、その厄封じの祈願の為に建立されたことが窺えます。

内部は、八面の一角に阿弥陀如来の立像が安置され、その真後ろに聖徳太子像が置かれています。その他の面は観音開きの扉の内部に経典を収蔵しています。このようなスタイルは「輪転経蔵」の定番のようで、聖徳太子信仰の影響も感じさせます。この経蔵の建造時期は、金属扉の内側に刻まれた文字から江戸時代の文政年間だと推定されます。福円寺本堂は江戸末期に火災に遭い、天保十三年頃に再建されたようですが、その時の火災の火の手も逃れ、福井地震にも耐え、度重なる台風にも耐えて、今も殆ど軋みなく静かに回転します。細かな装飾といいバランスといい、建立当時の職人技には大変驚かされます。

厄病封じの祈願ということだけを取上げますとこれも真宗の教えとは反するような印象を持たれる方も在るとおもいます。しかし、疫病に罹り亡くなっていかれた方々と、残された方々、また疫病の蔓延を恐れる方々の祈りが「輪転経蔵」という形で表されたのだとも思われ、であればこそ、建造にあたった人々も真剣に当時としての最上級の技術を注いで作ったのだと思われるのです。

※江戸期の一般的概念として「法力」という超常的なものを力として認めていたようです。